明末清初の大乗円頓教

浅井 紀

はじめに

中国明清時代の民間宗教に大乗円頓教がある。この教派は明末清初期のいくつかの民間宗教の教派と直接的あるいは間接的関係のもとで形成された。またその経典であるいくつかの宝巻には、明清時代の代表的宝巻が含まれている。この教派の形成過程を明らかにすることは、いまだに不明の部分が多い明清時代の民間宗教諸教派の成立過程や、それらの教派の教義の形成過程の一端を明らかにしよう。中国民間宗教史の観点から言うならば、聞香教と大乗円頓教はいわゆる宝巻流民間宗教の諸教派の中で主流となる諸教派の一つに属しており、その諸側面の説明は民間宗教の歴史と特質の説明に寄与するところが大きい。

大乗円頓教は明末天啓四年（一六二四）に弓長（張某）なる人物

により創始された。この天啓四年に先立つ天啓二年（一六二二）五月、現在の山東省と河北省を中心に、徐鴻儒・于弘志らを主たる指導者とする聞香教（東大乘教）の乱が勃発した¹⁾。これは明代最大の宗教反乱である。聞香教徒によって組織された反乱軍は激しく明朝当局の軍隊と戦ったが、結局、同年一〇月に平定された。その後、天啓三年一二月、聞香教の教主王好賢が逃亡先の揚州で逮捕され、のち処刑された。大乗円頓教が創始されたのは、官憲により聞香教の反乱勢力がほぼ完全に鎮圧された直後であり、創始者弓長は聞香教の流れを汲む人物であった。また、この天啓四年は民間宗教で末劫の到来の年とされていた。明末の多くの民間宗教がそうであるように、大乗円頓教の教義もまた末劫に起こる災難から人々を救済することを強調した。

弓長が大乗円頓教を創始した経緯とその教義を説く経典『古仏天真考証龍華宝経』（以後、『龍華経』と簡称する）は早くから注目さ

れ、これまでにいくつもの研究がなされてきた。ことに澤田瑞穂氏は、『龍華経』に基づいてこの教派の歴史と教義の一端を最初に明らかにした。澤田氏は、弓長の弟子木人すなわち李某が『龍華経』の作成に重要な役割を果たしたと、この木人は同時に『木人開山顕教明宗宝卷』（以後、『木人宝卷』と簡称する）を作成したことを指摘した。澤田氏の研究により、大乗円頓教と『龍華経』に関する理解は進んだが、依然として不明の部分も少なくない。そこで本論は、澤田氏が用いなかった『木人宝卷』の完本（二四品本）と『銷釈接統蓮宗宝卷』（以後『接統蓮宗宝卷』と簡称する）を加え、あらためて考察を進めたい。この『接統蓮宗宝卷』もまた木人の手になり、その成立時期は『龍華経』と『木人宝卷』の後になる。これら三寶卷は全て木人が作成に関与しているから、内容上に矛盾する所はなく、相互補完的に用いることができる。本論は、これらの三寶卷の内容を比較検討し、三者の作成過程と大乗円頓教の歴史の一端を明らかにしたい。なお、この教派の教義を始めとする思想的側面については別稿に譲る。

一、木人と三寶卷の成立

本論で取り上げる大乗円頓教の三寶卷がどのように作成されたか、その詳細な経過はいまだ明らかでない。ただし、これらの宝卷の中には、作成経過の解明の手がかりとなる記述が見られる。以下、それらの記述とこれまでの研究を参照し、三寶卷の作成過程を検討していく。

『龍華経』

この宝卷は序と四卷二四品で構成されている。その内容の中心は、天啓四年、大乗円頓教の創始者弓長が末劫の到来に際し、無生老母から命ぜられて衆生の救済に当たる顛末である。この『龍華経』の成立過程を明らかにした澤田氏は大略次のように述べる。明末万曆年間、燕南趙北（現在の河北省保定道高陽県）、草橋関桑園里大宝荘の人弓長は、灤州石仏口（現在の河北省灤県）に住む聞香教教主の王森の弟子となった。前述の天啓二年の反乱が平定された二年後の天啓四年、弓長は大乗円頓教を創始した。その後、崇禎二年（一六二九）、弓長は南に下って黄河を渡り、南京をはじめとする各地を巡って布教した。さらに、崇禎一四年（一六四一）、弓長は弟子五人を連れて灤州石仏口を訪れ、各種の經典を集めた。その經典『龍華経』の直接の製作者が誰であるかは明らかでなく、幾人もの教徒がその製作に当たったと考えられる。『龍華経』の作成が行われたのが清代順治九年（一六五二）である。それを筆写したのは木人（李某）なる人物であり、天然なる人物が校閲し、主だった教徒が協力して順治一二年（一六五五）に刊行した。この過程で木人が最も深く関与した。この木人はさら『木人宝卷』を作成した。

以上のような澤田氏の所説を、『龍華経』と澤田氏が閲読することができなかった『木人宝卷』『接統蓮宗宝卷』により、改めて検討してみよう。『龍華経』の作成と刊行に関して、三寶卷に見い出される記事は、左のとおりである。

『龍華経』

〔第六品〕天真老母顕神通、木人演法唾真経、龍華尊経伝留世、
 経今尚未布流通、陸陵壬辰経出現、聖警木子写騰清。二木・天
 然同奮志、還源策警顕真心、木馬紅牛合聖意、替相開板転法輪。

〔第二二品〕昔日法王留真經、後有弓長転法輪、法從西轉流東土、
 ・・辛巳年間纔発現、千二百部妙玄文。弓長領定真五老。石
 仏域内取真經。不是雲首効能大、末期龍華祖為尊。・・真經
 出現緣人至、後有木子写騰真、聖唾一部龍華卷、刻板印行祖教
 興。衆頭行同心合意、齊搭手刻板施行。・・弓長演說龍華經、
 指外説裏合一身。刊板印造伝天下、一字流出妙法輪。・・龍
 華經、天真心印、弓長祖、密寄双林。至龍年、真經出現、木馬
 歳、丁丑施行。祖警中、吩咐木子、将真經、抄写謄清、嘱天然、
 証明字眼、闡祖教、演法度生、化緣人、同來搭手、捨資財、開
 板流通。

〔第二四品〕真子普伝僧、統道闡宗門、天然同搭手、普応度衆生、
 双林収法偈、普化演真經、願人明聖意、木子転法輪。辰年経出
 現、木馬法流通、丁丑念二日、開板立合同、青羊己卯月、経板
 果完成。募化諸聖賢、同共発真心、捐貲成聖事、万古註芳名、
 末後龍華会、箇箇統蓮宗。

〔木人宝卷〕第一五品
 師徒閑叙、問老爺自從甲申年三月初四日卯時廻宮。入聖教載有
 余。・・我有縁、遇老祖、領授修行。壬午年、入聖会、参拜
 老祖。甲申年、祖廻宮、今日相逢。丙戌年、立祖教、開船普度。
 戊子年、領鑰匙、将法開通。壬辰年、写祖經、明心見性。甲午
 年、開山卷、祖教興隆。

〔接統蓮宗宝卷〕第三六品
 在壬午年、参拜弓長、親蒙授偈。在壬辰年、写祖龍華經一部。
 明心見性。・・戊子年中明心見性、壬辰年中写祖經。

これらの記事により、『龍華經』の作成過程を検討してみよう。

『龍華經』第一二品の記事によれば、弓長が崇禎一四年に五人の弟
 子を連れて、師であった故王森の本拠地灤州石仏口で經典の収集を
 行い、王森の遺した千二百部の經典の中から真經を取ったとある。
 王森が千二百部經典を遺したというのは明らかに誇張であり、実際
 はもつと少なかったと思われるが、末後すなわち末劫の龍華祖の教
 えを説く真經があったということは事実であった可能性が高い。言
 うまでもなく、龍華とは弥勒仏が地上に降生した際に開く三度の龍
 華会を指しているから、龍華祖とは弥勒仏を指していると考えられ
 る。弓長が石仏口で得た經典と『龍華經』との関係は不明であるが、
 彼が石仏口での經典の収集により、弥勒仏と龍華会に関する教えを
 継承したことは確かであろう。この一二品の記事の後段で、『龍華
 經』は天真の心印（心髓）であると述べている。天真とは後述する
 ごとく、大乘円頓教の歴代祖師の中で石仏祖と弓長祖の間に位置し
 ている天真祖である。『龍華經』は石仏王祖の教えをそのまま継承
 したものでなく、その成立にこの天真祖が何らかの関係が有ること
 が考えられる。このことについては後で検討する。

『龍華經』の作成過程について、この第一二品の記事に、弓長が
 『龍華經』を演説したとあり、『木人宝卷』にも同様の記述があるか
 ら、『龍華經』が弓長によって作られたことは確かであろう。ただ
 し、現存の『龍華經』には、後述するように、弓長の死後その教徒
 が協力して『龍華經』を刊行したことに關する記述があり、少なく
 ともその部分は弓長の生前には無かったと言える。要するに、弓長
 は現存の『龍華經』のもととなる草稿を作ったと言うことができよ
 う。

前掲の『木人宝卷』第一五品の記事によれば、弓長は甲申（崇禎

一七年、一六四四）陰曆三月四日に亡くなったという。そして、『龍華經』第一二品は、弓長が『龍華經』を密かに双林（林姓の人物か）に託したと述べている。同じ『龍華經』の最後の品である第二四品も、天上世界から帰るよう命令を受けた弓長が、自分の死後協力を弟子達に託し、『龍華經』を遺すので、教徒が心を合わせないと説いたとある。『木人宝卷』も弓長が『龍華經』を双林に託したことを記す。

ところが、同じ『龍華經』の記事では、龍年すなわち壬辰（順治九年、一六五二）に経が出現したとする。双林に託した『龍華經』がなぜ順治九年に出現したのか。しかも、その後に『龍華經』が刊行される際、双林あるいは二木と称される人物が木人に協力している。もし刊行に関わったこの双林・二木が弓長から『龍華經』の原稿を託された双林と同一人物であるならば、この間の経過はいささか釈然としない。この間の経過をあえて推測するならば、一つの可能性として、弓長の作成した草稿が何らかの理由で双林に託され、弓長の死後隠されていたが、あらためて木人らの手に渡ったことが考えられる。

前掲の『龍華經』第六品の記事では、『龍華經』が現れた後、それを木人が清書し、二木と天然がともに発奮して作成に当たったことが述べられている。第一二品でも、「真経」が現れたのち、木子がそれを清書し、天然子が校閲したとある。前掲の『接統蓮宗宝卷』第三六品では、木人が「弓長」祖の『龍華經』を書いたと述べている。以上の記事を総合するならば、弓長が遺した『龍華經』の原稿は二木（双林）に託され、木人が清書し、天然子が校閲したと推定

される。『木人宝卷』でも、木子（真木子）が経巻を吐き、双木子が経巻を留め、草木子（天然子）が字眼を証明したと述べ、この三人が協力して『龍華經』を制作し刊行したことを記している。

このようにして出来上がった原稿の刊行については、前掲の『龍華經』第六品に「木馬紅牛合聖意、替祖開板転法輪。」とあり、第一二品に「同来搭手、捨資財、開板流通。」とあり、第二四品に「木馬法流通、丁丑念二日、開板立合同、青羊己卯月、経板果完成。募化諸聖賢、同共発真心、捐贊成聖事、万古註芳名。」とある。これらの記事は何を意味しているであろうか。ここで言う木馬とは「きのえうま」、すなわち甲午、順治二年（一六五四）であり、青羊とは、青が五行の木を指していることから、「きのとひつじ」、すなわち乙未、順治二年（一六五五）を指していると考えられる。第六品に見える「紅牛」とは、紅は火を指し、天干では丙・丁を指す。牛は地支の丑に当たる。これを第一二品では「丁丑」、第二四品では、「丁丑念二日」としているから、丁丑を意味していることは間違いない。「丁丑念二日」とは丑月が二月を指しているから、順治一年の一月二二日になる。同様に「青羊己卯月」が乙未すなわち順治一二年の卯月すなわち二月を指していると考えられる。

以上のことを総合するならば、『龍華經』の刊行の経過は次のように考えられるであろう。この宝卷の作成と刊行は木人・天然子・二木といった指導的教徒が協力して行った。順治一年一月二二日に『龍華經』の版木を作るに当たり、合同（契約書）を立てて取り決めた。翌順治二年二月に版木が完成したので、寄付金を募り、寄付者の名を記して刊行した。前述したように、木人はさらに『木人宝卷』と『接統蓮宗宝卷』の編纂に関わっている。そこで次に、

『木人宝卷』について検討しよう。

『木人宝卷』

『木人宝卷』は本来二四品よりなっているが、私がこれまで用いていたのは第四品までしかない残本であった。しかし最近、二四品全部が揃っている鈔本の『木人宝卷』を入手できた。木人がこれらの三宝巻の作成に関わった前後経過は、前掲の『木人宝卷』第一五品、二〇品と『接続蓮宗宝卷』第三六品によれば、次のようなものであった。木人は明代万曆三十七年（一六〇九）に生まれ、壬午年（崇禎一五年、一六四二）に大乘円頓教に入教し、教祖弓長の弟子になった。崇禎一七年陰曆三月四日に弓長が亡くなると、丙戌年（順治三年、一六四六）に弓長の教えを立てて布教を行い、戊子年（順治五年、一六四八）に悟りを開いた。その後、壬辰年（順治九年、一六五二）に『龍華経』を書き、甲午年（順治一一年、一六五四）に『木人宝卷』を留め、己亥年（順治一六年、一六五九）に『接続蓮宗宝卷』を書いたというものである。『木人宝卷』は、木人がこの宝巻を作った理由は、彼が夢の中で弓長に会い、弓長よりその教えを説く宝巻を作らうと命ぜられたからであると説いている。このことは『木人宝卷』が弓長の死後、その教えを継承する動機で作成されたことを示している。

ただし、『木人宝卷』の中で繰り返し述べられているのは、木人が師弓長の教えを継承し、「開山立教」すること、すなわち新教派を開くことである。このことから、木人が弓長の教えを継承しつつも、単なる継承に終わらず、新たな宗派を創始する意志を持って宝巻を作製したことが窺われる。そのことは、『木人宝卷』の巻首において、老古仏・無生老母・太上老君・釈迦仏・孔聖儒童仏とい

た諸神諸仏、石仏王祖・呂皇聖祖・弓長祖の三人の民間宗教の教祖が、木人に「開山顕教」させたと言っていることにも示されている。木人はこれら諸教派を継承し、それらを統一した教義を説いているということを強調しているのである。また、『木人宝卷』第一二品には、木人が天上の家郷の雷音寺に赴き、無生老母にまみえ、天元宝蔵庫から『木人宝卷』『接続蓮宗宝卷』『浄土涅槃還郷宝卷』『三教収円宝卷』『方法皈一宝卷』の「五部靈文」をもらい、法門を立てたことが述べられている。形の上では天上世界でもらったとされているが、実際には木人がこれら「五部靈文」を著したと言える。木人にとって、『龍華経』が師弓長の宝巻であるのに対し、これら五部の宝巻は自己自身の經典として、新しい教派設立の基礎に据えるものと見なしたのであろう。このうち『木人宝卷』は新宗派を開きその教義を説くものとして位置付けられているのである。「五部靈文」のうち、『木人宝卷』と『接続蓮宗宝卷』を除く残りの三宝巻は管見の限りでは、その存否は不明である。

『接続蓮宗宝卷』

この宝巻は三宝巻の中で最後に作成されたものであり、三六品で構成され、大乘円頓教の歴史と教義を述べて最も詳しい。その第三六品によれば、木人は順治一六年（一六五九）から、まず『接続蓮宗宝卷』を書き、次いで『浄土涅槃還郷宝卷』『三教収円宝卷』『方法皈一宝卷』の三宝巻を書いたが、大乘円頓教の教えは盛んにならず、これら「五部靈文」もいまだ流通しなかった。助ける人も少なく、木人は貧しかったが善願を変えず、自己の利益や名声のために經典や教えを残すのでなく、ただ後世の人間が輪廻の苦しみから抜け出るために、昼は働き、夜は真夜中まで經典を書いた。そして、

紅梅の領袖（天然子）が重要な言葉の意味を明らかにし、納川という僧が昼夜労苦をして写経をし、多くの善人が資財を喜捨したお陰で刻板が流通したという¹¹¹。このように、『木人宝卷』以下の「五部靈文」は、木人に紅梅天然子と僧納川が協力して作成されたと見なされる。

『接続蓮宗宝卷』は『龍華経』よりもさらに体系的に大乗円頓教の系統を他教派にまでわたって述べている。この中で木人は、大乗円頓教の法灯すなわち教えの流れを説きつつ、彼自身が弓長の後継者であり、かつその教えを再興し興隆させた人物であることを示そうとしていたと考えられる。この宝卷は三六品で構成されているが、後述するように、各品に木人の配下と見なされる三宗五派九杆一八枝の三十六人の教徒が登場し、その教義を展開する先導役をつとめている。そのような構成から見て、この宝卷は大乗円頓教の流れと、その中における木人の位置を最もよく表した経典と言える。

『龍華経』と弓長に関する年表はすでに澤田瑞穂氏が作成したものが¹¹²あるが、澤田氏の年表にこれら三宝卷から得られた知見を併せると、弓長と諸宝卷に関する年表は以下のようなものとなる。

万曆年間（一五七三—一六二〇）王森が聞香教（東大乘教）を創始。

弓長が王森に会い弟子となる。

一六〇九年（万曆三十七年）木人（李某）生まれる。

一六一四年（万曆四十二年）王森逮捕される。

一六一九年（万曆四十七年）王森が獄死する。

一六二二年（天啓二年）五月、聞香教徒の徐鴻儒ら反乱。一〇月、

平定される。

一六二三年（天啓三年）一二月、聞香教主の王好賢が揚州で逮捕さ

れ、のち刑死。

一六二四年（天啓四年）弓長が大乗円頓教を創始する。末劫到来の年とされる。

一六二九年（崇禎二年）弓長が南北各地で伝道。

一六三九年（崇禎十二年）大法が興る。

一六四一年（崇禎十四年）弓長が石仏口へ行き經典を集める。

一六四二年（崇禎十五年）木人が大乗円頓教に入り、弓長の弟子と

なる。

一六四三年（崇禎十六年）瘟疫流行。

一六四四年（崇禎十七年）弓長死去。明朝が滅亡し、清朝が入関。

一六四六年（順治三年）木人が弓長の教えを立て、布教活動をする。

一六四八年（順治五年）木人が「悟り」を開く。

一六五二年（順治九年）木人が『龍華経』の稿本を完成させる。

一六五四年（順治十一年）木人が『龍華経』を清書する。木人が

『木人開山宝卷』を留める。

一六五五年（順治十二年）『龍華経』の経版が完成する。

一六五九年（順治十六年）木人が『接続蓮宗宝卷』を書く。次いで、

『浄土涅槃還郷宝卷』『三教収円宝卷』

『万法皈一宝卷』を書く。

以上の年表から、大乗円頓教が天啓年間の聞香教徒の反乱の直後に生まれ、その教徒が明末の混乱の中で布教活動を行い、弓長の死と明朝の滅亡の中でも教派を存続させ、清初に木人を中心として、『龍華経』と『五部靈文』とされる五宝卷を作成した、おおよその経過を見て取ることができよう。そこで次章では、この年表を念頭に置き、大乗円頓教の歴史がどのようなものであったか、より詳しく

く考察してゆきたい。

二、大乘円頓教の流れ——王森・弓長・木人

大乘円頓教の成立と変遷については、三宝巻に多くの記事が見い出されるが、概括的に述べたものに、『龍華経』第一六品の次のような記事がある。

後來法王石仏悟徹明宗、明祖心印、在無影山、同天真老祖、批下蓮宗、同發善願、悟徹性宗、明祖心印。在中央聖地、同翠花張姐、批下蓮宗、同發善願、悟徹心宗、明祖心印。在聖地、同弓長老祖、批下蓮宗、同發善願、悟徹真宗、明祖心印。在世間、同三宗五派、九杆十八枝頭行、批下蓮宗、同發善願、接統性宗、明祖心印。・・・卻說無極會下、有二十四祖、接統蓮宗、・・・統無量祖會下、有五祖七真、接統蓮宗、扶宗立教、找化人天。統石仏王祖會下、有三花五葉頭行、接統蓮宗、替祖伝法、闡教扶宗、找化人天。統天真祖會下、有十乘頭統、接統蓮宗、替祖伝法、闡教扶宗、找化人天。統翠花張姐會下、有十善大護法、接統蓮宗、替祖伝法、闡教扶宗、找化人天。統弓長會下、有紅梅統灯、領袖縁人、総引・領衆・会主・総会・開示・会頭・香頭、会下皇胎子女、各等領法知識、都会接統蓮宗、替祖伝法、闡教扶宗、找化人天。

この記事では、大乘円頓教の教えは蓮宗として表現されている。蓮宗とは、南宋時代の茅子元の創始した念仏結社白蓮宗を指す言葉であろう。もしそうであるならば、大乘円頓教は自らを白蓮宗の後継者であると見なしていることになる。一般的に言って、中国の宝

巻流民間宗教の基礎に阿弥陀念仏の信仰があることは否定できない。『龍華経』を始め、多くの宝巻の各処に「南無阿弥陀仏」と記されている。

この記事が説いているように、大乘円頓教は法王石仏―天真祖―翠花張姐―弓長へと継承された。さらに、石仏王祖の下に三花五葉の頭行があり、天真祖のもとに十乗の頭統があり、翠花張姐の下に十善の大護法があり、弓長の下に紅梅統頭、総引・領衆・会主・総会・開示・会頭・香頭といった教徒がいたとする。この中の法王石仏は『龍華経』の他の部分にも登場するが、聞香教の創始者灤州石仏口の王森を指していることは言うまでもない。

また、『接統蓮宗宝巻』第一九品では、大乘円頓教の木人までの教えの流れをより詳しく、次のように言う。同教の教えは無生母から始まり、(1)李老君―(2)天真古仏―十乘(頭統)―(5)翠花張姐(姐)―十善(大護法)―(6)弓長―三宗五派頭行―(7)統燈―十貴十会頭行―(8)紅梅領袖―十明大善頭行―(9)総引知識―十真接統―(10)木人に受け継がれたと言う。ここで付された数字は、この第一九品において付けられている登場の順番の数字である。さらに、『接統蓮宗宝巻』第二二品は木人の弟子に詳しく言及し、大乘円頓教の教えは無生父母より法王石仏へ、法王石仏から天真へ、天真から弓長へ、弓長から統領へ、統領から木人へ、木人から総会・開示・経主・五家会頭・九老知識・十八護法へと伝わったと説いている。『接統蓮宗宝巻』第二二品も、その教えは無生老母から〔法王〕石仏・弓長・統領・木人へと伝えられ、それから三宗五派・九杆〔一〕八枝領衆に伝えられ、さらに総会・開示・経主・会頭・九老知識・十八護法等に伝えられたと説く。なお、『接統蓮宗宝巻』第一五品では、十明

大善頭行以下の教徒にも全て紅梅という名称が付けられているから、紅梅は特定の教徒に限定されていた名称でないと言える。以上の記事を総合するならば、一部で不明確なところもあるが、大乗円頓教の流れは次のような系統図となる。

無生父母―李老君―石仏老祖（三花五葉頭行）―天真祖（十乘頭統）
―翠花張祖（十善大護法）―弓長（三宗五派・九杆十八枝頭行―十
貴十会頭行―紅梅統灯―十明大善頭行―総引知識―十真接統）―木
人（総会・開示・経主・五家会頭・九老知識・十八護法）

以上見てきた大乗円頓教の教えの継承の流れを見るならば、神仏と実在の人物とが混在して説かれていることが分かる。このことについて最も詳しく説いている『接統蓮宗宝巻』を見ると、その三六品のうち、第一品から第十品までは宇宙生成論を説いている。すなわち、無極・太極・陰陽二気といった太極図の本体論を説き、次いで本体を神格化した無生父母を登場させる。さらに燃燈仏・釈迦・彌勒仏の三仏が過去・現在・未來三世を掌ることを説き、この三仏が老子・釈迦・孔子となって現れたことを説く。併せて儒仏道三教の諸神諸仏を登場させて教理を展開する。ここまででは現実の世界のことではなく、教理上の諸神諸仏の世界のことである。しかし、法王石仏以下、天真祖・翠花張祖（姐）・弓長祖・木人、さらには十乘・十善・十貴といった人物は歴史上実在していたと考えられる。統領・総会等は教徒の役職の名称である。そこで次に、この流れの中の主要人物について、その実像を検討していこう。

〔法王石仏〕

『接統蓮宗宝巻』で説かれている大乗円頓教の教えの継承者の中で、実在した人物は第一一品に登場する法王石仏からである。すでに述べたように、法王石仏は聞香教の創始者王森である。『接統蓮宗宝巻』第一一品によれば、法王石仏は本性が阿弥陀仏で、無生老母の命令を受けて石仏域中に降生し、大乗円頓法門を開き、三花五葉の頭行を設けて教えを伝え、蓮宗を接統した。さらに、木人に教派を立て自らの教えを興隆させたという。『木人宝巻』巻首にも、ほぼ同様の記事が見られる。注目されるのは、王森すなわち法王石仏の本性は阿弥陀仏で、蓮宗を接統したと説かれていることである。さらに、法王石仏は木人に教派を立てさせたことあり、木人が法王石仏の教えを継承していることを強調していることである。王森についてはすでにこれまで多くの研究がなされているが、『接統蓮宗宝巻』に説かれているのは、大乗円頓教の立場から見た王森である。『接統蓮宗宝巻』には、以前に私が拙稿で¹⁹⁾聞香教を取り上げた時に用いた『擒妖始末』や『餐微子集』には見られない記事があり、王森の教派の実態を知る上で参考になる。前述したように、石仏王祖の下に三花五葉の頭行と称する弟子がいたという。聞香教の教徒の組織については、すでに明末の史料に基づき、拙稿で論じたことがある。²⁰⁾それによれば、伝頭という教徒の指導者はいるが、頭行という役職名は出てこない。大乗円頓教の指導的幹部の役職名はむしろ西大乘教で使われていた役職名と同一であることが注目される。²¹⁾この理由が何によるものかは、今後の検討に待ちたい。王森の聞香教を、『木人宝巻』巻首では大乗円頓仏門、『接統蓮宗宝巻』第一一品では大乗正宗派と呼んでおり、ともに大乗円頓教と同系列のものとして説いている。ただし、次に述べるように、大乗円頓教が聞香教

(東大乘教)の単なる延長でないこともまた事実である。²²⁾

〔天真祖〕

法王石仏の教えは天真祖に継承されたとされる。『龍華経』や『接統蓮宗宝卷』には、この天真祖あるいは天真古仏に関する記述が多数見出される。つまり石仏口の王森から弓長に教えが伝わる間に天真祖とされる人物が介在していたことになる。天真祖とはいかなる者であろうか。これについて、『龍華経』第三品は、西方教主阿弥陀仏が北方に転じ、無量寿仏と号し、無量寿仏が臨凡して真武老祖といひ、真武老祖が臨凡して天真古仏といひ、天真が臨凡して弓長老祖という、と説いている。²³⁾一方、『接統蓮宗宝卷』一三品は、天真が阿弥陀仏すなわち無量寿仏に転じ、さらに真武老祖に転じ、燕南趙北の潭州郡二龍河鰲頭地に下生した。真仏は姓名を隠し、金牛洞で厳しい修行をし、やがてある時に悟りを開き、金丹道を伝えたと説く。この天真仏の下には十乗の頭統が置かれ、その教えを継承したという。²⁴⁾

この天真仏の化身とされる天真祖は実在の人物のように認められる。しかし、その事績は明らかでなく、潭州郡二龍河という地名も管見の限りでは実在しない。この天真祖が大乗円頓教の歴史の中でどのような位置を占めているのかはつきりしない。天真祖は阿弥陀仏の転生を重ねたものであるとされているが、金丹道を伝えたとされているから、道教系統の教えをもたらした人物である可能性がある。そもそも『龍華経』は正式名称を『古仏天真考証龍華宝経』と言うように、それは天真仏の教えを説いた宝卷である。このことから、弓長は石仏王祖の教えを継承する一方で、それにとどまらず、天真祖の系統の道教の金丹道を取り入れたことが考えられる。金丹

道とは金丹を作る方法であろうが、金丹を作る方法には外丹法と内丹法が有ることはよく知られている。外丹法とは金石・丹砂等を用いて金丹を焼成する方法であり、内丹法とは人間の体内の精・気・神を用いて体内に金丹を作る方法である。『龍華経』を始めとする三宝卷において際だった特徴は、道教の内丹法による修行を中核的教義としていふことである。²⁵⁾『龍華経』第五品に、無生老母が弓長に、地上においてどのような修行をしたかを問い、王森が弓長に授けた修行法を否定し、新たに十歩修行法を授ける一段がある。この十歩修行は内丹法に他ならない。この十歩修行は無生老母から伝えられたとされているが、事実は弓長が聞香教に無かった十歩修行の内丹法を他の人物すなわち天真祖から教わった可能性がある。天真祖から伝えられた金丹道とはこの内丹法を指し、大乗円頓教が聞香教と異なる点はこの内丹法が加わったことである可能性がある。なお、天真仏の下に十乗頭統が有ったというが、その実態はよく分からない。

〔翠花張姐〕

前掲の『龍華経』第一六品では、法王石仏と弓長の間に翠花張姐(祖)が置かれている。すでに澤田瑞穂氏は、翠花張姐が弓長を石仏王祖に引き会わせた事実を指摘している。²⁶⁾私も以前、拙著で翠花張姐について論じたことがある。²⁷⁾その際、明末万暦年間、聞香教の総伝頭張廷が北京の翠花胡同に住んでおり、その子孫と見なされる張氏も翠花胡同に住み、清代嘉慶年間まで存続していたことを指摘した。以上のことから、「中央聖地」で蓮宗を接統した翠花張姐は翠花胡同の張氏の一族であると見なした。以上の結論に、『接統蓮宗宝卷』はいくつかの新たな事実を加える。すなわち、『接統蓮宗

宝卷』第一四品は、天真祖と弓長の間に翠花張公なる人物を置き、翠花張公は石仏王祖が大乘法門を立てた後、その教えを理解する者が少ないので、王祖に替わって教えを整理して伝え、十善大頭行すなわち十枝総引を立てたと言う。²⁸この翠花張公は『龍華経』で言う翠花張姐に他ならない。以上のような『接統蓮宗宝卷』の記事は、その細部の表現は別として、基本的に『龍華経』の記事と一致する。ただ、『龍華経』第五品、二四品では、弓長が石仏王祖の弟子となつた際、翠花張姐が弓長を石仏王祖に紹介したと説くのに対し、『接統蓮宗宝卷』はそのような事実と言及していない。さらに、『龍華経』第一六品では、翠花張姐は「中央聖地」で蓮宗を接統し、鳳凰山でも活動したことを説いている。²⁹一方、『接統蓮宗宝卷』第一四品は、翠花張公は鳳凰坡なる処に家があつたと説いている。³⁰この鳳凰坡がどこに在るのかは不明である。以上の『龍華経』と『接統蓮宗宝卷』の記事を総合しても、翠花張姐については依然として不明の部分が少ない。

〔弓長〕

弓長の本名について、澤田氏は張豪であるとする説があることを紹介している。³¹中国の陳俊峰氏は大乗円頓教の『古仏無生玉華結果尊経』という宝卷により、弓長の俗称を張海量、道号を無双であるとしている。³²この宝卷は未見であり、この説も張豪とする説ともどもその真偽を確定できない。また、『龍華経』は弓長が燕南趙北の草橋関桑園里大宝荘に居住していたと説く。澤田氏に拠れば、この場所は明末の北直隸（河北省 保定道高陽県にあるという。³³しかし、澤田氏の説は根拠が明示されていない。一方、『接統蓮宗宝卷』第三三品は、弓長が霸州（直隸順天府霸州）に生まれ、大宝荘に家が

あつたと記している。³⁴中国の陳俊峰氏も、弓長は河北霸州草橋関桑園里大宝荘の人であるとする。³⁵霸州は民国期に霸県になつてゐるから、陳氏の説は『接統蓮宗宝卷』と一致する。民国『霸県志』を見るに、草橋関・桑園里と太保荘は見出しされるが、大宝荘は見出しされない。民国『高陽県志』にも、草橋関は見出しされるが、桑園里と大宝荘は見出しされない。³⁶このように、弓長の生地に関してもいまだ確定的なことは言えないが、総合的に見て、『接統蓮宗宝卷』の説く霸州のほうが高陽県よりも信憑性がある。

次に、弓長に関連する主要な事柄について、前掲の年表を参照しながら検討していこう。弓長は翠花張姐の仲介で石仏王祖を師として拝し、その教えを受けたといわれる。³⁷これまで述べてきたように、大乗円頓教では王森と翠花張姐を自派の祖師の中に入れており、弓長が先ず聞香教徒となつたことは確かである。三宝卷では、弓長は天啓四年（一六二四）に「明心見性」した、すなわち悟りを開いたとされている。これは『龍華経』の説くところによれば、弓長に天真仏が降り、その化身となつたことを指す。天啓四年という年は下元甲子に当たり、大乗円頓教では末劫の到来の年とされていた。³⁸すでに述べたように、この年は天啓二年五月から始まつた聞香教徒の反乱が、教主王好賢が天啓三年一二月に揚州で官憲に逮捕されたことを最後に、ようやく収束した年である。この結果、聞香教の組織はほぼ壊滅した。聞香教に属していたと考えられる弓長が新たに大乗円頓教を開くことになつたのは、おそらく彼が王森の衣鉢を継ぐ意味が込められていたことと思われる。

『龍華経』の主題は天真仏の化身となつた弓長が、無生老母の命を受け、大乗円頓教を創始して、末劫の災難に苦しむ衆生を救う願

末である。無生老母は弓長に通天宝（通天鑰匙）・蘆伯点杖・真言口訣・四句妙偈・八句真文・十字仏号・龍華経・皈家聖表を与えたという。^④『龍華経』も形のうえでは無生老母から弓長に与えられたものとなっているのである。また、通天宝・通天鑰匙という名称は、黄天道の経典『普静如来鑰匙通天宝卷』と類似していることが注目される。私は前稿で黄天道と聞香教・大乘円頓教が何らかの関係があったことを指摘した。^⑤このことについては後述する。

弓長が悟りを開いたあと、のちに紅梅天然子となる人物が八人の者を連れてきたので、教徒にして紅梅の名を与えた。この時の八人が三宗五派に組織された。すなわち、（三宗）頭宗天元子・二宗明元子・三宗真元子、（五派）頭派迎春子・二派発春子・三派宜春子・四派景春子・五派収源子である。前掲の『龍華経』第一六品の記事は、紅梅天然子・三宗五派の下に、九杆一八枝の頭行があり、さらに、総引・領衆・会主・総会・開示・経主・会頭・香頭といった教徒の役職があったことを記している。この大乘円頓教の組織は、弓長の「南北展道」と関係がある。「南北展道」とは、前掲の弓長に関する年表に見られるように、弓長が崇禎二年に全国各地に赴いて行った布教活動である。これについてはすでに澤田瑞穂氏が明らかにしているが、^⑥ここで改めて『龍華経』南北展道品第一により、弓長の布教活動を述べれば、あらまし次のようなものであった。

崇禎二年（一六二九）、弓長は無生老母より伝道を行うようにとの啓示を受けたとし、郷里を発ち、南に向かつて黄河を渡った。まず、黄河の南岸で船頭の普広という者を弟子とした。次いで正月一五日に河南の開封に到り、街の十字路で坐禅を組み、人々に末劫が迫っていることを説き、そこで承天祖という者に授記した。それか

ら南京に行き、そこで紅梅の九杆の大頭行を立てた。三月三日には南京で蟠桃聖会を開いた。さらに、七月一五日に湖広の武当山に行き、許真人に会った。弓長はこの許真人とともに、九月九日、四川大我山玄天洞に至り、南霞・雲霞・丹霞・烟霞の四祖に会った。そこで朝源聖会を行い、のちに龍華会で逢うことを願った。その後、大頭行の普亮という者が多くの道人を率いて弓長を迎えた。弓長はそれから湖広の承天府（湖北省鍾祥県）、揚州（天心府）に行っている。

以上のような弓長の「南北展道」はやや散漫な印象を与えるが、組織上見落とせないことがある。弓長の作った教徒組織は紅梅頭・紅梅中・紅梅尾の三地域に分かれており、紅梅頭は北直隸、紅梅中は南京、紅梅尾は湖広の承天府に置かれた。同じ『龍華経』南北展道品第一の別の部分に、次のごとくある。

紅梅頭、北直隸、安身立命。分三宗、立五派、執掌蓮宗。紅梅中、金陵郡、九杆枝葉。有九家、大頭行、教化善人。紅梅尾、立承天、一十八領。大三枝、度穀弓、願滿迴程。・・・建康金陵立九杆、男女老少皈吾教。湖広承天二九枝、大地元人聽祖道。この記事によれば、弓長は北直隸（河北省）の教徒を三宗五派に組織し、金陵すなわち南京の教徒を九杆の頭行に組織し、湖広承天府の教徒を一八枝に組織したというのである。つまり、弓長は三宗五派は紅梅頭に、九杆は紅梅中に、一八枝は湖広の承天に、地域ごとに組織を変えて作ったことになる。弓長は「南北展道」によって獲得した教徒を、地域別に紅梅の頭・中・尾の三つに組織したと言える。このような組織にはかなり言葉の上の形式主義が見られ、どこまで実体を備えたものであったのか疑問がある。しかし、『龍華

『経』で述べられているような弓長の布教活動や大乗円頓教の組織は一定の歴史的事実を反映したものであろうことも推測される。前述の大乗円頓教の教徒に頭行・総引・領衆といった名称が見られる。これらは組織における指導的教徒の役職であろうが、その詳細は明らかでない。

弓長はこの後、崇禎一四年（一六四一）、灤州石仏口に行き經典を集めている。聞香教は天啓年間の反乱の後、その勢力は壊滅していた。しかし、清代に教主王氏一族の者が教名を白陽斎や清茶門と変えて布教活動を続け、しばしば官憲の摘発を受けていることから、当時、王氏一族は依然としてその教えを保持していたと考えられる。石仏口には多くの宝巻が存在しており、弓長は自己の教派の教義を整え、經典を作成する必要から石仏口を訪れたものであろう。この翌年の崇禎一五年、木人が弓長の弟子になっている。弓長が没したのは崇禎一七年陰曆三月四日であり、この月に明朝が滅亡した。『接統蓮宗宝巻』第一六品は、弓長が自分の死後その教えを接統する者がいなくなることを恐れ、三人の統燈領袖総引を立て、三大総引、三賢統燈と名付けたと述べる。⁴⁵

〔木人〕

本論文で取り上げた三宝巻の作成に関わった木人（李某）は、大乗円頓教の歴代祖師の中でどのような位置にあるのであろうか。『木人宝巻』⁴⁶によれば、木人は万曆三七年（一六〇九）に生まれ、中央聖地の路陵庄で布教活動をしていたとされている。この場所がどこに在るのかはまだ特定できていない。大乗円頓教における木人の関歴について、前掲の『接統蓮宗宝巻』第二一品では、弓長の弟子の統領が木人に教えを伝えたとしている。前述したように、『接

統蓮宗宝巻』第三六品では、木人は崇禎一五年（一六四二）に弓長に会ったとされている。『木人宝巻』⁴⁷に拠れば、木人は崇禎一五年に弓長に会ったあと、陳某を度師とし、王某を引進とし、孫某を保挙（保証人？）としている。この度師・引進・保挙の意味するところはいまだ明らかでない。その後順治五年、紅梅天然子が木人の保挙となり、双木子が統燈を領したとする。この間の経緯は明らかでないが、天然子と双木子は木人が『龍華経』を協力して刊行した人物であることが注目される。

同宝巻の第二二品では、木人はその教えを三宗五派の頭行、九杆一八枝の領衆に伝え、さらに総会・開示・經主・会頭・九老知識・一八護法、僧尼道俗諸色人等諸家宗門に伝えたと説く。この総会以下の役職の教徒の実態は明らかでないが、『接統蓮宗宝巻』第二二品では、この一八護法が一八枝とされている。すなわち総会・開示・經主は三宗、五家会頭は五派、九老知識は九杆、一八護法は一八枝にそれぞれ当たる。しかも、これらの教徒の名は弓長の三宗五派九杆一八枝の教徒の名と全く異なっている。したがって、彼らは弓長の三宗五派九杆一八枝の教徒ではなく、木人が布教活動によって得た教徒であり、木人が三宗五派九杆一八枝の形式に基づき、改めて組織した者たちであると考えられる。このことは、『接統蓮宗宝巻』第一品に、木人は祖法を受け継ぎ、三宗五派の人を整理し、新たに三宗五派九杆一八枝の組織を立てたと述べていることによってもある程度裏付けられる。⁴⁸つまり木人は先ず弓長の弟子となり、弓長の死後、その教えと教徒を継承し、新たに教団組織を再興したと言える。その過程で自らの教派の流れと自己の正統性を確認するために、これら三宝巻が作成されたと考えられる。ちなみに、『接

『統蓮宗宝卷』はその三六の各品において、木人配下の三宗・五派・九杆・一八枝の合計三六人の総引を登場させ、これら総引がそれぞれ神や仏に対し教義について質問するという形式で、その教えを展開している。

三、大乘円頓教の系統

これまで述べてきた大乘円頓教の歴代祖師と教徒の流れを、『統蓮宗宝卷』はさらに別の言葉で整理して述べている。この記事からも、大乘円頓教の教徒が自己の教派をどのような諸教派の流れの中に位置づけているかを見て取ることができる。そこには中国の伝統的儒仏道三教も有れば、民間宗教諸教も有る。『統蓮宗宝卷』の各品の挙げる教派は次のようになる。

第三品、無生宗派（無生父母）。第四品、燃灯宗派（燃灯仏）、釈迦宗派（釈迦仏）、弥勒宗派（弥勒仏）。第五品、立混元一字派（老子）、釈迦雪山派（釈迦）、魯国儒門派（孔子）。ここまでは無生父母を起点とし、燃灯仏・釈迦仏・弥勒仏の三仏が過去・現在・未来の三世を掌ることを述べ、その三仏が老子・釈迦・孔子に当たるとしている。

次いで『統蓮宗宝卷』は第六、第七品で、仏教と道教の諸派を列挙し、第九品では百子姓宗派として、周文王が八卦を説いたことを述べる。第一〇品では、五行宗派として、先天老君すなわち老子が陰陽五行を教えたことを説く。ここまでは、大乘円頓教が無生父母信仰及び古代以来の儒仏道三教の各教派の流れを継承していることを説いている。

次いで第一一品では、聞香教の法王石仏（王森）を大乘正宗派とし、第一二品では、西大乘教の呂皇聖祖（呂祖）を大乘円通派とし、第一三品で天真祖を一字源流派としている。このうち西大乘教については後述する。第一四品では、翠花張公（祖）を祖留心宗派とし、第一五品では、弓長を弓長蓮宗派としている。次いで、第一六品では弓長の教派を別に大乘円頓仏門と呼ぶ。さらに、弓長の弟子の紅梅統灯や十貴頭行らが合同（盟約書）を立て、その教えを継承したが、これを円頓合宗派と言う。その後第一七品では、弓長の弟子達はその教えを継承したことを述べ、これを領袖宗派と呼んだ。次いで第一八品では、弓長の弟子の紅梅の総引と十真が師の教えを大いに興こしたことを述べ、総引明宗派としている。第一九品では、木人の教えを大乘円頓仏門の性宗興隆派、あるいは大乘性宗円頓興隆仏門としている。ここでは木人が師に替わって法を説き、後人を救済したとされており、新たな宗派を開いたのと同等の扱いになっている。

第二〇品では、木人の弟子と九老善知識が祖師の心印を継承したことを述べ、円頓心印興隆派としている。第二二品では、木人の弟子三宗（総会・開示・経主）・五家会頭・一八護法を取り上げ、これらが弓長が作り上げた三宗五派九杆一八枝の組織を踏襲して作り上げられたものであることを示している。そしてこれらの木人の教徒を円頓仏門興隆派と呼ぶ。第二三品では、あらためて無生父母から石仏王祖・弓長・木人へ、さらには九六億の皇胎児女へとつながる教えの流れを述べ、流通円頓仏門興隆派としている。第二三品では、燃灯古仏が教えを立てたことを述べ、世界生成論を展開し、円頓考証玄宗派と呼ぶ。第二四品では、明代の民間宗教諸派の教祖を

挙げ、彼等を接続禪宗諸祖派と呼んでいる。この中には、弘陽教の飄高祖、無為教の羅祖、西大乘教の呂皇祖、黄天教(道)の普静祖、大乘教の石仏祖、円頓教の弓長祖などが挙げられている。第二五品では、燃灯仏・釈迦仏・弥勒仏の掌る過去・現在・未来の三世について述べ、円頓正宗派が蓮宗を接続していると説く。第二六品では、考証修行派という名称で、教徒の修行の結果の善し悪しを試されることを説く。第二七品では、円頓仏門修因派という名称で、上元開花会・中元聖会・下元収源聖会・蟠桃聖会・龍華聖会の五会において無生父母・天真古仏・弓長・木人と続く教えを継ぐ教徒がその信仰を試されると述べる。第二八品では、円頓修因興隆派と称して、燃灯仏・釈迦仏・弥勒仏の三仏が龍華聖会を立て、衆生を教化したことを言う。以後、第二九品から第三六品までの間は、円頓仏門興隆派或いは大乘仏門円頓興隆派・大乘円頓仏門興隆派といった名称で教理を展開している。

以上のような、『接続蓮宗宝卷』の各品に見られる記事から、大乘円頓教の教派の流れの一端を窺い知ることができる。第一品から第一〇品までは、大乘円頓教の教義の基礎になった儒仏道三教の要素と燃灯仏・釈迦仏・弥勒仏の三仏が過去・現在・未来の三世を掌るといふ教義とを結びつけて論じている。第一一品から第一九品までは、法王石仏―呂皇聖祖―天真祖―翠花張祖―弓長祖―紅梅統灯・十貫頭行―紅梅統引・十真―木人とながる流れが分かる。次いで第二〇品から第二一品では、総会・開示・経主・五家会頭・九老善知識・一八護法といった木人の教徒を取り上げ、それら大乘円頓興隆派としている。大乘円頓教を興隆させた教徒たちという意味付けをしているのである。このように見てくると、『接続蓮宗

宝卷』の記事は大乘円頓教の流れを、諸教派にふさわしい名称を付けて説いたものであると言える。そこには万教帰一の觀念が見られる。ただ、ここで注目すべきことに、『接続蓮宗宝卷』第三六品に普善祖なる存在が唐突に登場する。この普善祖については前稿⁵⁰⁾で論じたことがあり、黄天道と大乘円頓教との関係が問題となる。そこで、次章ではあらためてこのことについて論じよう。

四、大乘円頓教と黄天道

これまでの研究で大乘円頓教と黄天道の関係はしばしば論じられてきた。私も前稿⁵¹⁾で両者の間に聞香教(東大乘教)を媒介にして一定の関係があったことを指摘した。前稿で指摘したように、黄天道の經典『鑰匙宝卷』と『龍華経』『接続蓮宗宝卷』『木人宝卷』の三宝卷との間には内容上の内在的關係がある。ここで改めてこの点を検討してみよう。先ず第一に、教義の基本的組立が近似している。これらの宝卷の主要な教義は三期三仏説であるが、その内容は『鑰匙宝卷』と三宝卷においてほぼ一致している。過去・現在・未来をそれぞれ燃灯仏・釈迦仏・弥勒仏が掌る。この三仏がそれぞれ老子・釈迦・孔子、さらには太極・無極・皇極に対応していると説く。そして過去・現在・未来の時間の構造が異なっていると説く。そして、現在世の末期すなわち末劫の到来が下元甲子の年、天啓四年(一六二四)にあるとすることで共通している。そして、末劫に起こる種々の災難(劫難)に苦しむ衆生を救うために神仏の化身たる人物が下生する。『鑰匙宝卷』においては鑰匙仏であり、三宝卷においては弓長であるが、ともにそのものは阿弥陀仏であると説

く。しかも、この人物が弥勒仏の役割を果たす点でも共通している。家郷にあるとされる空王殿・都斗宮などの宮殿名も共通している。

第二に、この両教派の宝巻に共通しているのは、修行法として内丹法が説かれていることである。『龍華経』を始めとする大乘円頓教の宝巻は『普明宝巻』や『鑰匙宝巻』といった黄天道の宝巻が説いているのとはほぼ同じ内丹法を説いている。内丹法そのものは道教の修煉法であるが、この両教派では無生父母信仰及び弥勒下生信仰と結びつけて説いているのが共通した特徴である。このことについては別稿で論じている。このような両派の宝巻の共通性から考えて、大乘円頓教の宝巻が黄天道の宝巻の教義を継承した可能性が強い。ただし、このような教義は明清時代の民間宗教に共通している部分も多く、このことのみでは大乘円頓教と黄天道との間の関係を必ずしも証明できないかもしれない。

第三に、ここで付け加わるのが鑰匙仏と普善祖の存在である。前に拙稿で述べたように、『龍華経』を始めとする三宝巻には明末清初の民間宗教諸教派に関する記述がある。『龍華経』の中に黄天道の鑰匙仏すなわち儒童仏に関する記事が有ることは既に指摘した⁵³。さらに、『龍華経』には普善も登場する。『龍華経』第二三品は、無為教の四維祖（羅祖）、西大乘教の呂祖、黄天教（黄天道）の黄静祖（鄭普静）、大乘教（東大乘教）の石仏祖（王森）といった明代の民間宗教諸教派とその教祖を並べ、普善を円頓教主としている⁵⁴。円頓教とは、大乘円頓教を指しているとも考えられるが、大乘円頓教より以前に、黄天道普静派においても、自派を円頓教と称していたことに留意しなければならない⁵⁵。また、『龍華経』第二四品は、普善仏・儒童仏・天真仏を並べて万法帰一を説いている。この普善

は黄天道普静派第十祖汪普善を指すものと思われる。一方、『接統蓮宗宝巻』の最後の第三六品にも、唐突に普善なる人物に関する記事が見られる。それは次のように説いている。

燃灯仏会下二億三千皇胎兒女、万叟朝宗。积迦仏会下二億三千皇胎兒女、万叟朝宗。弥勒仏会下九十六億三千皇胎兒女、万叟朝宗。後有普善仏出世、同十大聖祖、収縁結果。無生母曰吾将十聖賢能、九十六億皇胎兒女、続在都斗雲盤、貫在九宮八卦、安身立命。紅梅第一圓聖子、領九億六万三千皇胎兒女、続在乾卦宮安身立命。

その説く所によれば、燃灯仏の下で二億三千（万）の皇胎兒女が、积迦仏の下で二億三千（万）の皇胎兒女が救われた後、弥勒仏の下で九十六億三千（万）（別の箇所では九十二億）の皇胎兒女が救われるという。その後普善仏が世に出て、十大聖祖とともに皇胎兒女を救うというのである。第三六品は続けて、この十人の聖祖を圓聖子・頓聖子・真聖子・教聖子・法聖子・当聖子・来聖子・証聖子・金聖子・身聖子であるとしている。この十人にはいずれも紅梅という名称がつけられているが、この十人の名は『龍華経』と『接統蓮宗宝巻』に見られる三宗五派・九杆一八枝の教徒中には全く見い出されない。したがって、これらの十大聖祖は弓長や木人の配下の教徒であったとは考えにくい。同じ『接統蓮宗宝巻』第三六品はさらに、普善について次のように説いている。

普善仏子従出世、十大聖祖落凡籠。普駕法船収万類、一了残雲不剩星。連泥帶水斉出苦、纔満無生発願心。末後一着円頓教、諸仏万祖願相逢。・・・普善哈哈笑、末後円頓教、十聖達此宗、収縁蓮花樂。古仏収縁蓮花樂、無生老母定三乘。

ここで言う末後の円頓教も黄天道普静派の別称である可能性が高い。しかも、「連泥帯水」は黄天道の『普明宝卷』『鑰匙宝卷』『弥勒出西宝卷』にも出て来る表現である。『鑰匙宝卷』によれば、泥は陽、水は陰を表し、陰陽の交わりにより天・地・人の諸存在が生まれるとする。すなわち、天の陰陽が仙仏を生み、地の陰陽が万物を生み、人の陰陽が男女を生むとする。したがって、「連泥帯水斉出苦」とは、世界の仙仏・男女・万物を全て引き連れて苦しみから出る、という意味に理解できる。『鑰匙宝卷』にはこのほかに、「連泥帯水斉出世」⁽⁵⁷⁾、「連泥帯水上船登」⁽⁵⁸⁾といった言葉が見い出される。『普明宝卷』には、「連泥帯水上法船」⁽⁵⁹⁾とある。『弥勒出西宝卷』には、「弥勒仏収円、連泥帯水一斉赴雲盤」⁽⁶⁰⁾とある。要するに、弥勒仏が末劫において、全ての存在を残らず引き連れて救済するということを説いているのである。この『接続蓮宗宝卷』の記事も同様の趣旨であると言える。この「連泥帯水」という表現は黄天道の三宝巻には頻出するが、大乗円頓教の『龍華経』『木人宝巻』には見出されず、『接続蓮宗宝巻』では普善に関する記事のみに見い出される。このことから、「連泥帯水」は黄天道系の宝巻に見られる特徴的表現であることが分かる。

以上のことから考えて、『接続蓮宗宝巻』第三六品に登場する普善は黄天道系長生教の第十祖汪普善であることは間違いないであろう。私は前稿で普善が黄天道普静派の第十祖であり、黄天道が大乗円頓教と関係があったことを推定したが⁽⁴⁾、本論でも改めてこのことを確認したい。このように普善が大乗円頓教の中で歴代祖師に並ぶ扱いを受けていることは、同派と黄天道との間の一定の関係を示すものである。

さらに注目すべきことに、この第三六分は普善に関して、「収縁蓮花楽、古仏収縁蓮花楽」という興味深いことを述べている。蓮花楽とは当時の民間で歌われていた歌曲の一種である。蓮花楽に関しては、黄天道普静派の長生教の宝巻である『大聖弥勒化度宝巻』第八品に、弥勒仏が無生老母の命を受け、衆生（皇胎儿女）を救済するために下生し、姿を次々に変えて浙江省各地を布教して歩きながら、「我は浙江の地域の諸仏が集まる処で気ままに逍遙し、口には蓮花楽を唱え、ゆつくりと衆生を済度する。」と述べたことを記す。この弥勒仏も蓮花楽を歌って衆生の救済に当たっていたのである。この弥勒仏の活動は長生教の浙江省における布教活動を反映したものであると考えられ、そこには弥勒仏の化身とされる黄天道普静派第十祖で長生教を創始した普善の存在が投影されている。普善は弥勒仏であり、かつ儒童玉仏であり、衆生の救済に当たったとされている。しかも普善は浙江省衢州府西安県の谿灘の無影山の前の蓮花港の三星堂で説法したとされており、ここでも蓮花が登場する。さらに、長生教の宝巻『伏魔宝巻』にも、手で蓮花楽を打ちながら、念仏を唱える一段がある。要するに蓮花楽は黄天道系長生教で布教の際に歌われた曲であると考えられる。したがって、『接続蓮宗宝巻』の普善が長生教の普善であるならば、蓮花楽が出てくるのも頷けるであろう。ただし、『龍華経』と『木人宝巻』にも蓮花楽のことは出て来るので、蓮花楽は大乗円頓教でも使われていたことが分かる。黄天道系長生教と大乗円頓教における蓮花楽については、今後さらに検討する必要がある。

さらに見落とせないのが、大乗円頓教と関連ある教派としての西大乘教である。関連と言っても、直接的ではなく間接的なものであ

る。『接統蓮宗宝卷』第一二品は、大乘円通派として、観音老母が陝西省西安府王寿村に下生して呂姐すなわち呂皇聖祖となり、円通と号したこと、のちに、北京に保明寺を立てたことを述べている。これは保明寺を根拠地とした西大乘教を指している。西大乘教については既に李世瑜氏⁶⁷⁾や馬西沙・韓秉方⁶⁸⁾氏の研究がある。ことに李世瑜氏は王森がはじめ西大乘教に属していたとし、東大乘教を西大乘教の支派と見なしている。李氏は必ずしも確実な根拠を示しておらず、この両教の関係がいかなるものであったか確言することはできない。西大乘教と東大乘教の成立過程はいまだ十分には明らかになっていない。しかしながら、第一章で述べたように、『木人宝卷』に、法王石仏・呂皇聖祖・弓長祖の三者が木人を「開山顯教」させたとということが述べられており、木人は自己の教派が西大乘教の流れを継承していることを説いていたと見なされる。しかも、前述したように、西大乘教の総引・頭行・頭統・領衆といった教徒の役職名が大乘円頓教にも見られる。このことは大乘円頓教が西大乘教の役職名を継承した可能性がある。現時点では、西大乘教の宝卷等の諸史料を見ることができないので、両教の具体的関係はこれ以上明らかにすることはできない。

小 結

これまで主として大乘円頓教の三宝卷により、三宝卷と同教の成立経過、教祖と教徒の系譜、さらには同教と他の教派との関係について検討し、大乘円頓教の歴史の一端を明らかにした。大乘円頓教は聞香教（東大乘教）が壊滅的打撃を受けた直後、明末天啓四年、

聞香教の流れを汲む弓長により創始された。大乘円頓教の創始には聞香教を再建する意味が込められていたと考えられる。ただし、大乘円頓教は単に聞香教を再建したものではなく、他の教派の教義、特に道教の内丹法の教義を取り入れて、新たな教派として立てられたものであった。その教義は、明末清初という王朝交替の激動期において、聞香教の教義を継承し、末劫における救済を強調するものであった。すなわち明末天啓四年を下元甲子、末劫の到来の年と見なして、弥勒仏の下生と無生父母よって行われる「還郷」による救済を説いた。一方で道教の内丹法の修煉を取り入れ、終末論的教義と結びつけた。これは歴史の激動期において、無生父母信仰と弥勒下生信仰と内丹法を核とする民間宗教の展開の重要な歴史的事例となろう。弓長は教派を立てた後、国内各地を巡って布教活動をし、教徒を九杆一八枝の組織に編成した。弓長が明朝の滅亡と同じ月、崇禎一七年三月に亡くなったのち、清初の順治年間、その弟子たちは木人を中心にして、弓長の残した草稿をもとに『龍華経』を作成して刊行し、大乘円頓教の教えを継承した。

さらに木人は、弓長の教えを継承したのみならず、大乘円頓教を新たな教派として再生させ、自らをこの新教派の創始者として位置付けた。木人は自己の教徒を弓長に倣い九杆一八枝に組織し、新たに『木人宝卷』『接統蓮宗宝卷』をはじめとする五宝卷を作成し、自己の新教派の基礎に据えた。『木人宝卷』と『接統蓮宗宝卷』の中では、聞香教ばかりでなく、西大乘教も自らの先行教派と見なされており、黄天道系長生教の普善も大乘円頓教と何らかの関係があったことが示唆されている。これらの教派は大乘円頓教の形成に直接的或いは間接的に関わったと言えることができる。同時に大乘円頓

教は、中国の古代から明末清初に至る、儒仏道三教をはじめとする諸宗教の流れの中に自らを位置付けている。同教は先行する諸教の教義を継承し、それらを混合して自らの教義を形成したと説き、万教帰一の理念を掲げた。大乗円頓教はまさに明末の諸教派の教義を集大成した観がある。しかし、大乗円頓教と先行する諸教派との関係、大乗円頓教の諸宝巻において説かれている教義の形成過程についても、いまだ不明の部分が少なくない。これらのことは、今後さらに検討する必要があるが、いずれも後稿に譲りたい。

註

- (1) 明末天啓二年の聞香教の反乱については、拙著(一九九〇)『明清時代民間宗教結社の研究』研文出版、二〇九―三一〇頁、第三章「明末天啓二年の聞香教徒の反乱」参照。
- (2) 大乗円頓教に関する研究としては以下の研究がある。澤田瑞穂(一九五五)「龍華経の研究」『跡見学園紀要』第二号、一三―三八頁(再録、同氏(一九七二)『校注・破邪詳辯』、龍華経の研究、道教刊行会)。前掲註(一) 拙著、二二〇―二二三頁、第一篇第三章、「明清時代の宝巻と諸教派」。馬西沙・韓秉方(一九九二)『中国民間宗教史』上海人民出版社、第四章、明清時代の円頓教。陳俊峰(一九九九)「有関東大乘教的重要発現」『世界宗教研究』一九九九年第一期。
- (3) 前掲註(2) 澤田瑞穂(一九七二)所載「龍華経の研究」二〇四―二〇七頁参照。
- (4) 澤田氏が用いたのは、全体二四品のうち、第四品までの残本である。本論で用いるのは、最近出版された王見川・林万伝主編『明清民間宗教経巻文献』第五冊(新文豊出版公司、一九九九年)所収のものであり、本来の二四品よりなる完本の鈔本である。第四品までの内容は、これまで用いてきた第四品までしかない残本と同一である。

(5) 前掲註(2) 澤田瑞穂(一九七二)一九一―二〇七頁参照。

(6) 『木人宝巻』第二二品に「老祖云、我在世親留一部龍華真経。交与元人、景中伝偈。囑咐木人、抄写一部、密寄双林、伝留在世。・・・真木子吐経発巻、双木子演教留経。草木子証明字眼、三木子報祖深恩。」とある。

(7) 『龍華経』第二四品
弓長祖在経堂、端然正坐。忽然間知覚動、祖要廻宮。・・・祖待要入聖宮、帰家去了。問頭行、無恃靠、怎立法門。留下部龍華経、興隆祖教。囑咐你、衆頭行都要合心。你與我同搭手、刊板印造。到後來龍華会、福祿無窮。

(8) 前掲註(6) の記事参照。

(9) 前掲註(6) の記事参照。

(10) 前掲註(4) 参照。

(11) 『接統蓮宗宝巻』第三六品

在壬午年、参拜弓長、親蒙授偈。在壬辰年、写祖龍華経一部。明心見性。在甲午年、留開山経一部、興隆祖教。在己亥年、写蓮宗経一部。還写三部。法未興隆、缺少助養、五部靈文未得流通。貧子不違善願。何日成功。不為利名。只為後人、白日応景、夜晚写経、三更半夜、費盡辛勤、木人留経。虧紅梅領袖証明字眼。又虧納川真僧、晝夜勞真、抄写経文。又虧衆家善人喜施資財、刻板流通。・・・法王石仏演大乘。弓長老祖立法門。・・・東方木子纒出世。・・・壬午年間拜長弓。・・・木人明心写宝巻、一坐三更那知聞。白日応景巴活計、夜晚慇懃写祖経。不為利名留経教、只為後人出苦輪。・・・戊子年中明心性。壬辰年中写祖経。甲午年留開山経。己亥年来写蓮宗・三教・涅槃・皈一法。五部靈文未流通。紅梅領袖証字眼。納川真僧写祖経。八十一了留経巻。三人同來転法輪。

(12) 『木人宝巻』第一品参照。

(13) 『木人宝巻』第二二品

母說我発金光鑰匙一把、開開天元宝藏庫、着木子恁意所取。・・・母說木子取的那是幾部経書。木子曰頭一部木人開山宝

- 卷、第二部接統蓮宗宝卷、第三部是浄土涅槃還郷宝卷、第四部是三教取圓宝卷、第五部是万法皈一宝卷。弟子取的是這五部經文。
- (14) 前掲註(11)の『接統蓮宗宝卷』第三六品の記事参照。
- (15) 前掲註(2)澤田論文(一九七二)一九三—一九七頁参照。
- (16) 『龍華經』第五品
弓長曰、吾兒在東土領石仏王祖修行、伝与我三皈五戒、挑開四相、喚醒緣神、看守門戸、觀定一針。
同宝卷、第一二品
昔日法王留真經、後有弓長転法輪。
- (17) 『接統蓮宗宝卷』第二一品に次のような記事がある。
自從家郷無生父母在都斗太皇宮演教伝法、將西来大意・大乘妙法・先天鑰匙、伝与法王石仏、石仏伝与天真、天真伝与弓長、弓長伝与統領、統領伝与木人、木人伝与総会・開示・經主・五家会頭・九老知識・十八護法、普度衆生・僧俗・四衆人等、都要皈宗入派、有処安身。
- (18) 『接統蓮宗宝卷』第一一品
經云、却說法王石仏四字。法者是西来妙法。王者是法王臨東。石者是石仏出世。仏者是古性弥陀。這便是法王石仏。・・・石仏曰想当初在家郷靈山会上、古仏面前批下蓮宗、發下誓願。奉無生老母命令・・・落在東土石仏域中・・・立三花五葉頭行・・・能便木人開山頓教・・・設大乘円頓法門。
- (19) 浅井紀(一九七八)「明末の間香教について」『明代史研究』第六号、一一—一九頁。(のち、浅井紀(一九九〇)に加筆再録)。
- (20) 前掲註(1)浅井紀(一九九〇)一九一頁、一九九頁参照。
- (21) 李世瑜(一九八五)「順天保明寺考」『北京史苑』第三輯、北京出版社、五四—五五頁参照。『接統蓮宗宝卷』第一二品に、次のごとくある。
(円通教主観音老)母曰我不免的下生人間、落在陝西西安府王寿村呂宅投胎。・・・立四十八箇頭行、選八大総引。一総引分六枝杆頭統。共統六八四十八箇頭行。
- (22) 前掲註(2)馬西沙・韓秉方(一九九二)『中国民間宗教史』八七六頁は、『龍華經』の第五品の記事が、弓長が無生老母の口を借りて石仏王祖から教わった静座功夫では金丹を成すことができなことを述べ、無生老母から教えられた十歩修行を説いていることから、大乘円頓教が間香教の単なる継承に終わっていないことを指摘している。
- (23) 『龍華經』第三品
祖母吩咐、当初西方教主阿弥陀仏転到北方掌教、号曰無量寿仏。無量寿仏臨凡、号曰真武老祖。真武臨凡、曰天真古仏。天真臨凡、号曰弓長老祖。
- (24) 『接統蓮宗宝卷』第一三品
天真曰無量天真者乃是西方教主阿弥陀仏、転到北方掌教、号曰無量寿仏。無量天真臨凡号曰真武老祖、從在武当山立下玄教。今又来臨下凡、化俗為善、下生潭州郡二龍河鰲頭地、隱性埋名、伝一步金丹妙理。演說一字為宗、設教伝法、乃天真門無量仏一字金身教。置立法門、立十乘頭統、接統伝宗、修煉金丹一粒。將五行配合一身之造化。・・・無量寿仏設玄宗、天真古仏化俗中。下生燕南和趙北、二龍潭州隱姓名。祖居三山熬頭地、金牛洞裡苦修行。諸日參禪常搭坐、晝夜下苦煉身心。忽然一日明心性、一字金丹法流通。・・・無量仏、古天真、臨凡下生、二龍河、潭州郡、隱姓埋名。三山頭、不出戸、熬頭居住。金牛洞、隱聖体、暗造靈文。伝一步、金丹道、西来大意。
- (25) 『龍華經』や『木人宝卷』などの宝卷の説く内丹法については拙稿『宝卷流宗教結社と道教』(講座「道教」第五卷「道教と中国社会」、雄山閣出版、二〇〇〇年一月所収)参照。
- (26) 『龍華經』第五品
祖母金口吩咐弓長・・・我且問你、汝在東土行的是那步功夫。弓長曰、吾兒在東土、領石仏王祖修行、伝与我三皈五戒。挑開四相、喚醒緣神、看守門戸、觀定一針。・・・母曰以無箇運転、呆呆的坐到幾時、這便是前天開荒的功夫、斯乃線路修行也。吾今伝你後天消息、出細功夫、与前不同。稀有之法伝与你。・・・母伝与你十件修行、救度衆生。

- 前掲註(22) 参照。
- (27) 前掲註(2) 澤田瑞穂(一九七二) 一九九頁参照。
- (28) 前掲註(2) 浅井紀『明清時代民間宗教結社の研究』二〇一—二三頁参照。
- (29) 『接統蓮宗宝卷』第一四品
石仏王祖当初在世演教伝宗設立大乘法門、立下三花五葉八家頭統。輩輩依法。在無影山前、普駕法船、渡下八大枝杆人縁、搬枝牢守不解其意。因此翠花張公出世、重新整理、伝留一步大乘妙法、演教伝宗、立十善大頭行、乃十枝総引。後又伝後、接統心宗、灯灯相統。・・・翠花張公現金身、鳳凰坡前有家門。・・・翠花祖、重出世、扶宗闡教、替石仏、老法王、演教伝宗、・・・伝十善、衆頭行、領授法宝、・・・翠花張公笑哈哈、十枝頭統認一家。得赴龍華道遙樂、十善手粘一枝花。
- (30) 『龍華経』第二四品
凡性本是弓長祖、家住燕南大宝村。自幼喫齋心慈善、参師訪友拜高人。翠花張姐為引進、投拜真仏法王尊。
- (31) 本文中に提示の『龍華経』第一六品の記事及び同品の次の記事。
翠花祖、明心印、扶宗闡教。中央地、化賢良、替仏伝灯(第二二品)。鳳凰山、留心宗。搭手助道
- (32) 前掲註(29) の記事参照。
- (33) 前掲註(2) 澤田瑞穂(一九七二)「龍華経の研究」一九二頁参照。
- (34) 前掲註(2) 陳俊峰論考二二一頁参照。
- (35) 弓長の事績は、前掲註(2) 澤田瑞穂(一九七二)「龍華経の研究」一九二頁参照。
- (36) 『接統蓮宗宝卷』第三三品に、次のようにある。
偈曰、弓長祖立法門。原是古仏下天宮。那裡起来那裡落。将祖根源説分明。聖性投凡霸州地。大宝莊上有家門。
- (37) 前掲註(2) 陳俊峰論文二二一頁参照。
- (38) 民国『霸県志』卷二、交通、古蹟、民国『高陽県志』卷一、地理、古蹟参照。
- (39) 前掲註(16) の『龍華経』第五品の記事及び前掲註(30) の記事参照。
- (40) 『木人宝卷』第一八品は、歴史的時間における上元甲子・中元甲子・下元甲子の三時期について述べている。それによれば、上元甲子には人々の生活が好く、天下の民が安樂で、五穀豊穡の時である。中元甲子には食べ物も品物も十分にあり、国も民も安らかであり、念仏をし、経を読む。下元甲子には末劫になり、種々の災難が起こるとして説かれている。この記事によれば、この三元甲子は繰り返されるものとして説かれている。一方、光緒十八年(一八九二)版の『増補玉匣記』下巻によれば、上元甲子を康熙二十三年(一六八四)、中元甲子を乾隆九年(一七四四)、下元甲子を嘉慶九年(一八〇四)としている。三元甲子の間は六〇年であり、下元甲子とされる嘉慶九年は天啓四年から一八〇年後であり、この一八〇年を周期としていることが分かる。これは中国の術数家の説であり、循環論的時代区分である。民間宗教はこれに弥勒下生信仰による終末論的性格をつけ加えたと言える。
- (41) 『接統蓮宗宝卷』第一五品
無生母・・・伝弓長、通天宝、蘆伯点杖。説与你、四句偈、八句真文、十字仏、龍華経、皈家聖表。
- (42) 浅井紀(一九九七)「黄天道とその宝卷」『東海大学紀要文学部』第六七輯、二二—一六頁、参照。
- (43) 前掲註(2) 澤田瑞穂(一九七二)「龍華経の研究」一九二—二〇一頁参照。
- (44) 前掲註(1) の拙著三四四—三五五頁参照。
- (45) 『接統蓮宗宝卷』第一六品
禪師曰我弓長老祖設立下大乘円頓宗門、惟恐無人接統伝燈。因此立下統燈領袖総引、乃為三大総引、是三賢統燈。祖將西来大意、通天聖宝・混元鑰匙・真言口訣。・・・交与統燈。祖将大法流通、廻宮入聖。
- (46) 『木人宝卷』二〇品に、
木人曰、我弟子生在黄鷄之歳、金羊月、金蛇日、金虎之時。祖用

- 掌心訣。按天元五行四相、推了一遍。有了己酉年、辛未月、辛未日、庚寅時。
とある。黄鶏歳すなわち己酉年は、万曆三十七年（一六〇九）と見なすべきであろう。
- (47) 『木人宝卷』第一五品
弟子在壬午年、先参拜過老爺。後來拜耳東為度師、一土為引進、子系為保拳。在丙戌年、三人開道、五人扶宗、度化人緣立会。因耳東点不多伝。到戊子年、有紅梅領袖天然子保拳、双木子領統灯、中善子鑰匙。
- (48) 『接統蓮宗宝卷』第二二品
〔無生老〕母曰自從混沌初分無始以來、在家鄉太皇演教。無生聖意伝与石仏。石仏聖意伝与弓長。弓長聖意伝与統領。統領聖意伝与木人。木人聖意伝与三宗五派頭行・九杆八枝領衆、又伝与総会・開示・経主・会頭・九老知識・十八護法・僧尼道俗諸色人等諸家宗門。
- (49) 『接統蓮宗宝卷』第一一品
後有目人從世出、整理三宗五派人、……目人出世、明聖意、將祖法、整理三乘。將宗派、和枝杆、從新安立。
- (50) 前掲註(42) 拙稿
- (51) 同前。
- (52) 前掲註(25) の拙稿参照。
- (53) 前掲註(42) の拙稿参照。
- (54) 『龍華経』第二三品
無為教、設宗門、度下兒女、四維祖、領貧兒、皈依仏門。西大乘、立法門、度下兒女、呂菩薩、領鄉兒、龍華相逢。黄天教、設宗門、度下兒女、黄靜祖、領皇胎、皈依仏門。……大乘教、立法門、度下兒女、石仏祖、領知識、龍華相逢。円頓教、設宗門、度下兒女。普善祖、領護法、皈依仏門。
- (55) 前掲註(42) の拙稿参照。
- (56) 『鑰匙宝卷』鑰匙仏如来開泥水分第三八参照。
- (57) 『鑰匙宝卷』第四九分
- (58) 『鑰匙宝卷』第五〇分
- (59) 『普明宝卷』第一五分
- (60) 『弥勒出西宝卷』卷首
- (61) 前掲註(42) 拙稿参照。
- (62) 蓮花楽(蓮花落)については、青木正児(一九七〇)「蓮花落記歌」(『青木正児全集』卷二、一四〇—一四三頁、春秋社、一九七〇年)に簡単な説明と日本語への翻訳がある。また、甘肅省河西地区の敦煌以東、嘉峪関一帯で流行していた宝卷を集めた『酒泉宝卷』三四二頁(甘肅人民出版社、一九九一年)に、『紅灯宝卷』の蓮花落が載せられている。それらの蓮花楽を見るに、歌詞は種々あり、一定していなかったようである。
- (63) 『大聖弥勒化度宝卷』第八品
我在越城地界諸仏聚集之処、散淡逍遙、口唱蓮花楽、緩緩再度一番便了。
- (64) 『衆喜宝卷』卷三、仏祖伝記
十祖普善師、儒童玉仏下凡、又即孔子性化。投衢州西安県汪正義為子。……谿灘江上開蓮花十里、……説法于古西湖谿灘前無影山前蓮花港上三星堂内。
- (65) 『護国佑民伏魔宝卷』第一八品
行在凡、就在聖、無隔無礙。到只步、天地裏、永統長生。手打着蓮花楽、口把仏念。動不動、発現出、無字真経。
- (66) 『接統蓮宗宝卷』第一二品
円通教主落凡塵、王寿村中借凡身。下生陝西西安府、顕化揚名渡衆生。観音老母臨凡世、呂皇聖祖号円通。……先渡南陽男和女、後化燕京立保明。
- (67) 前掲註(21) の李世瑜論考参照。
- (68) 前掲註(2) 馬西沙・韓秉方(一九九二)『中国民間宗教史』六五三一—六八八頁参照。
- (69) 前掲註(21) の李世瑜論考参照。

Da cheng yuan dun sect in late Ming and early Qing periods China

Asai Motoi

This article deals with the history of folk religious sect Da cheng yuan dun sect in late Ming and early Qing periods China. This sect was very important example to study the formation of folk religious sects which had scriptures called “bao juan”. This sect was established in 1624 by a man called Gong chang. Gong chang was the adherent of Wang Sen who was the Founder of Wen xiang sect (Dong Da cheng sect). The year 1624 was known as the time of “mo jie” (The end of present world). “Bao juan” of Da cheng yuan dun sect advocated that many disasters would occur at the end of present world, and that Maitreya would descend, save the people and establish “thousand-year kingdom” type of ideal world on earth.

Gong chang was admired as the incarnation of Maitreya by his adherents. This paper mainly studies about the career of Gong chang and his successor Mu ren to make clear the process of foundation and succession of this folk sect. Other important folk religious sects which were related to Da cheng yuan dun sect are also mentioned.